

國學院大學學術情報リポジトリ

日本における「自分史」の展開について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2024-06-19 キーワード (Ja): 自分史 , 色川大吉 , 自費出版 , 歴史課題 , 社会価値 キーワード (En): 作成者: 張, 恬, Zhang, Tian メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000498

日本における「自分史」の展開について

The Development of “Personal History” in Japan

張 恬

キーワード：自分史 色川大吉 自費出版 歴史課題 社会価値

Key Words: personal history Daikichi Irokawa self-publishing history assignment
social value

要旨

自分史は自分自身の生涯の出来事を文章化したものである。従来から存在している、何らかの領域で成功した人が書いた「自叙伝」とは違って、自分史は平凡に暮らしてきた人が、自身のそれまでの生涯を語るものである。日本において、自分史という用語は、1975年に歴史学者の色川大吉の『ある昭和史—自分史の試み』によって提唱され、民衆の戦争記録・生活記録運動と結びつけて一般人に普及した。現在では自費出版の商業販売ビジネスとして、自分史は多く書かれ、出版された。自分史の活用・研究は、歴史課題だけではなく、重要な社会的価値も持っている。本研究では、日本における自分史の展開に辿り着き、自分史の歴史・社会価値とその文化的意義を究明する。

Abstract

Personal history is a biography of the events of one's own life. Unlike the conventional “autobiography” written by a successful person in some field, personal history is a story of a person who has lived an ordinary life telling the story of his own life. In Japan, the term “personal history” was proposed in 1975 by the historian Daikichi Irokawa in “A Showa History: An Attempt at Personal history”. Now as a self-publishing commercial business, a large amount of personal history have been written and published.

The utilization and research of personal history not only address historical issues, but also have important social value. This research will looking back on the the development of personal history in Japan and investigate the historical and social value of personal history and its cultural significance.

はじめに

自分史は自分自身の生涯の出来事を文章化したものである。従来から存在している、何らかの領域で成功した人が書いた「自叙伝」とは違って、自分史は平凡

に暮らしてきた人が、自身のそれまでの生涯を語るものである。日本において、自分史という用語は、1975年に歴史学者の色川大吉の『ある昭和史—自分史の試み』によって提唱された。色川は、1968年から発足した橋本義夫の「ふだん記」運動が自分史の原型であると考えている。「ふだん記」グループをはじめとする自分史サークルが全国各地での展開に伴って、自分史は民衆の戦争記録・生活記録運動と結びつけて一般人に普及した。現在では自費出版の商業販売ビジネスとして、自分史は多く書かれ、出版された。

自分史の研究に豊かな成果が見られる。歴史研究の史料として、自分史は戦争体験などの一次資料であり、独自の価値を持っていると思われる。自分史の研究に豊かな成果が見られる。歴史研究の史料として、自分史は戦争体験などの一次資料であり、独自の価値を持っていると思われる。自分史の普及に伴って、自分史の社会的価値も重視されるようになり、自分史は高齢者健康増進や地域活性化の一環として注目を集める。自分史の執筆と高齢知的障害者の発症や、高齢者の社会的孤立への改善に関する研究が行われているが、80年代から自分史の普及を一つの社会現象として、その商業化と日本社会の関わりに関する研究は未だ少ない。

このように、自分史の活用・研究は、歴史課題だけではなく、重要な社会的価値も持っている。本研究では、日本における自分史の展開に辿り着き、自分史の歴史・社会価値とその文化的意義を究明する。まずは、日本の自分史の歴史を振り返り、自分史の提唱者である色川大吉の思想や、自分史と戦争体験を記録する民衆運動の結びを通じて、自分史の展開を考察する。次に、自分史が歴史学への問題提起に着目し、史料として自分史の研究価値を検討する。さらに、自分史の自費出版の市場を把握し、自分史の商業化を研究する。最後に、自分史の著者に高齢者が大半を占めているため、自分史と高齢化社会の関わりについて考察したい。

一、日本における自分史の歩み

(一)「自分史」の提出

自分史という用語は、歴史学者の色川大吉⁽¹⁾によって提出された。1975年、昭

(1) 色川大吉 (1925年-2021年)。千葉県生まれ。1948年東京大学文学部卒。日本の歴史家。東京

和五十年を迎える時点で、色川はが戦前戦後の日本と自分の歩みを振り返って、『ある昭和史－自分史の試み』を出版し、十五年戦争を生きた一庶民の「個人史」を立場にして、昭和全体の状況を浮かび上げようと試みた。色川は、客観的歴史観察と称して、自分を神にもひとしい超越的立場におこうとすることは幻想であると考え、同時代の出来事に対する偏見を自己点検し、修正し、歴史の全体像へと接近するために自分史を書くとして述べている。⁽²⁾『ある昭和史－自分史の試み』は三つの部分からなっており、色川自分の生涯を語る「十五年戦争を生きる」のほかに、世代の異にした一地方の常民を対象とする「ある常民の足跡」、そして「昭和史の天皇像」が収録されている。

色川は、日本歴史学において民衆思想史研究の第一人者とされている。色川大吉とは、「民衆」として、「民衆」に、「民衆」の歴史を説き、歴史に参加する歴史家として存在といわれる。歴史家もまず一人の庶民として、自分の経験に立ち帰り、その宿命的に負わされた偏見を修正しつつ、全体性との関連を認識する第一歩からはじめなければならないと提唱した。⁽³⁾

色川の民衆思想史研究は、戦後歴史学に位置付けられ、ランケ以来の実証主義に基づいた資料から歴史的事実を描くスタイルをとる。戦後、歴史学は皇国史観への反省から、二度と戦争の過ちを犯さぬよう科学的な態度によって事実を追及することを目的としてきた。山下洋輔は、歴史叙述、戦争体験、近代主義という三つのテーマから彼の思想をたどった。歴史叙述をめぐる色川の経験は、自分史研究で問題とされるフィクションに対する特徴を示す。そして、戦争体験を通して得た直感、民衆を主体とした歴史を提唱するための支えとなる。さらに、近代主義との格闘は、歴史に生きる自分の主体性の模索へとつながる。これらは、日本の自分史の特徴を示す要素と考えられる。⁽⁴⁾

(二)「ふだん記」運動の展開

色川は、1968年から発足した橋本義夫の「ふだん記」運動が自分史の原型であ

経済大学名誉教授。専門は日本近代史、思想史。主な著書に『新編明治精神史』『近代国家の出発』『明治の文化』『自由民権』『昭和史と天皇』など多数。

(2) 色川大吉、ある昭和史－自分史の試み、中央公論社、1975、p.39。

(3) 成田龍一、ある色川大吉考－「昭和」との格闘、2022年度東京経済大学学術シンポジウム。

(4) 山下洋輔、日本における自分史の特色、早稲田大学大学院教育学研究科紀要、別冊16号－1 2008年9月。

と考えている。「ふだん記」運動は、橋本義夫の提唱によって1968年に東京八王子市で生まれた庶民の文章運動である。橋本は「下手に書きなさい」と、まず文章を書くことをすすめ、「上手本意の競争をしないで、人生の報告書を一冊残すこと。美文名文などより、自分の生きてきた事実をありのままに記録すること」⁽⁵⁾と述べた。

「ふだん記」運動は、「中央・高名・外来」といった価値を排撃し、自分史を中心に「平凡人の文章運動」を発展させ、「競争しない、差別を許さない、自ら進んで喜んで書く、新人に拍手する（新人優先）、年功序列を認めない、劣等感をあたえない、あらゆる職業、地位の人と共に楽しむ」を「ふだん記の原則」⁽⁶⁾とする。そのため、「ふだん記」運動は、職業や地位、男女の差をこえて広く庶民に受け入れられ、読む側・見る側にいた人々が、書く側・作る側にまわり、自己表現の可能性にめざめた。「ふだん記運動」からはじまった「自分史運動」は、わずか数十年間に日本全国各地に二十七のふだん記グループを生み出し、多くの自分史を活化していた。

「ふだん記」は、年二回ほどの機関誌を出して、「独立するが孤立しない」をモットーに交流しあっている。原則として、一人で書いているより大勢の人と交流しながら書いて、ある程度書きためた文章を編集し直して一冊の自分史として出版している。こうして生まれた個人本が約500冊ほどになった。

色川は橋本の業績を高く評価し、「今では自分史を書くことを一つの生き甲斐とする運動が、社会の底辺に静かにひろがっている」⁽⁷⁾と述べている。この運動が広がって庶民自身の歴史が市民権を得ることで、人類史上かつてなかった新しい文化が芽生ええると考えられる。こういう現代における新しい理念共同体に夢になる人があり、陶醉と熱狂がおこった。ここから見ると、「ふだん記」のような文章結社は、新興宗教のそれにも似ていたことがあるが、色川は「ふだん記」を「庶民の自分史」として高く評価し、自分史運動の原型としてとらえている。

「ふだん記」運動からはじめ、日本全国各地に「自分史」と名の付くグループや、自治体によるセミナーは様々な様相を呈し、自分史サークルが全国各地で展開している。イベントとしては、日本自分史学会が主催する「私の物語 日本自分史大

(5) ふだん記について、株式会社清水工房・揺籃社ホームページ <https://www.simizukobo.com/>。

(6) 色川大吉、ある昭和史－自分史の試み、中央公論社、1975、p.261。

(7) 色川大吉、昭和史 世相篇、小学館、1994、p.188。

賞」が1997年から2011年まで11回を開催し、北九州市自分史文学賞は1990年から2013年まで24回実施された。兵庫県伊丹市市立図書館が毎年募集している「日本一短い自分史」は2022年で第9回を数える。また、一般社団法人自分史活用推進協議会では、「自分史フェスティバル」や「自分史まつり」を毎年開催している。

また、日本自分史センター（愛知県春日井市）や日本自分史文学館（山梨県吉田市）をはじめとする施設が設立され、図書館でも自費出版の納本を歓迎するなど、自分史の保存・研究が注目されるようになっている。

二、史料としての自分史

（一）歴史学への問題提起としての背景

1950年代前半、生活記録、生活綴り方、あるいはルポタージュ、記録文学において、普遍性と個別性、作為性と自然性、客観主義と当事者主義といった差異が議論されている。同じ時期に、歴史学においては、国民歴史学運動として歴史叙述をめぐる議論が行われた。⁽⁸⁾ 1955年に刊行され、今井清一、藤原彰、遠山茂樹らが執筆した『昭和史』（岩波新書）をめぐって、「昭和史」論争が起こした。本書籍は、題名の通り、日本の昭和時代を考察する歴史通史であり、執筆者3名がマルクス主義史観を採用していることから、その歴史叙述もそれに則って語られていた。⁽⁹⁾

文芸評論家の亀井勝一郎は、1956年2月発行の『文藝春秋』3月号に「現代歴史家への疑問 歴史家に「総合的」能力を要求することは果たして無理だろうか」を發表し、「この歴史には人間がいない」、「人物の描写力も実に乏しい」、「死者の声が全然ひびいていない」と『昭和史』を批判した。一方で個人の経験・叙述を史料とすると、歴史研究の科学性、歴史の客観性が薄くなる可能性があると思われる。そしてこれに対し、著者の遠山茂樹は歴史学の科学性を主張し、歴史学の研究方法を示した。遠山は、歴史叙述とは、ばらばらの人間ではなく、社会的存在

(8) 山下洋輔、日本における自分史の特色、早稲田大学大学院教育学研究科紀要、別冊16号－1 2008年9月。

(9) 長谷亮介、「戦後歴史学」から見る戦後日本における歴史学の変遷：歴史学研究会を例にして、博士論文：[法政大学]、2016。

の側面における人間が相互に作り出す関係、すなわち民族・階級・政治勢力の動きをとらえようとすることが重要だと主張している。こういう歴史認識と歴史叙述の主体に対する論争を契機に、戦後歴史学内部での自己批判が行われ、歴史の領域で民衆思想史の潮流が現われる。

こうした背景の下で、1975年に、色川は『ある昭和史—自分史の試み』を出版し、昭和前期の歴史のなかに歴史家の主体を押し出す歴史叙述を試みた。これは、「科学」に基づく態度による「客観的事実」の追求を目的とする歴史学への挑戦であるといえる。

(二) 自分史の研究価値

歴史学者である色川の提唱した自分史には、あくまでも「歴史」であるという大前提がある。その上で自分史というものを提案した理由は二つあった。まず、自分史は超越的立場における客観的歴史学より、人間の直接体験から世界認識を修正し、歴史の全体像へと接近することができる。色川は、歴史学者の超越的立場における歴史観察を批判し、「庶民」の歴史の価値をあげる。「その人なりの歴史、個人史は、当人にとってはかけがえのない「生きた証」であり、無限の想い出を秘めた喜怒哀歓の足跡なのである。——この足跡を軽んずる資格をもつ人間など、誰ひとり存在しない」と論じた。⁽¹⁰⁾

林健太郎は、歴史の進展に対する個人の役割を重視する立場に立ち、史料として自分史の研究価値が唯物史観の補充として捉えている。彼の歴史に対する見方は、その中における人間の意志の現象としての行為の能動性、すなわち歴史の進展に対する個人の役割を重視する立場に立ち、科学性を標榜する歴史家はとかく、たとい「必然理論」の唯物史観をとらなくても、事物の結果からそれ以前の経過を判断する傾向があり、歴史の中に存在した複数の可能性、その中における人間の決断とその行動の責任性を見逃すおそれなしとしない。⁽¹¹⁾

それについて、加藤周一がほかの視角から個人史を価値づける。個別的現象の特殊性をつきつめればつきつめるほど、そこに普遍的な意味のあらわれてくることある。個人の特殊な経験が、時代を反映するばかりでなく、鋭く時代を象徴す

(10) 色川大吉. ある昭和史—自分史の試み. 中央公論社, 1975, p.38.

(11) 林健太郎. 昭和史と私. 文藝春秋, 2002, p.398.

ることがあり、そこでは個人史と昭和史とが重なる。⁽¹²⁾近代化に伴う個人主義の風潮のなかで、人間の個性・主体性が強調され、マスメディアの発展と教育の普及によって、自分史を書ける人の数が急速に広がる。自分史を乗り越え、それを民衆共通の歴史にする民衆思想史は注目を集める。

また、自分史は「資料的価値」を持っていると思われる。最初に自分史を書くのは、戦争と深く関わった世代であり、自分史を書く場合、戦争を主題にしないとしても、戦争を避けて自分史を書くことは難しい。そのため、自分史を書く役割のひとつに、「戦争の証言」があると思われる。戦争を知る世代の人々が自分の言葉で書くことにより、庶民の戦時体験は戦争証言として残ることができる。それらの自分史を読むことによって、「被害者意識のみ強かったわたしは、侵略国のひとりであったことを確認」という学者もいる。⁽¹³⁾そして、戦争体験を書き残すことにより、次世代の人々が異常な時代を追体験でき、日本人の個別の戦争体験の中に「特殊日本人的共通性」を見出される。それから見ると、戦争体験を有する世代が書いた自分史は、貴重な研究資料である。

三、自分史の商業化

(一) 自分史ビジネスの展開

1980年代になると、自分史の様相が大きく転換し、自分史は自費出版ビジネスとして本格的に追及され始め、新たな展開を迎えた。

自分史の自費出版へのハードルは、1984年に福山琢磨が設立した「自費出版センター」を皮切りとした「物語産業」の誕生により大きく下がることとなる。また同年に福山が考案した、記入式で自分史を作成できる『自分史マニュアルメモリーノート』、これを携えた「自分史作り方教室」の全国各地での開催によって、自費出版される自分史だけでなく、高齢者向け・一般向けの自分史講座の増加というかたちで、自分史への一般の接点は拡大した。

これに眼を向けた出版業界は、出版不況からの脱出をめざしていたため、新たな企画を打ち出し、新書ブームをもたらした。この時期、いろいろな業種の企業

(12) 加藤周一編、私の昭和史、岩波書店、1988、p.8。

(13) 釋七月子、戦争の記憶と自分史の変遷：自分史の書き方本からのアプローチ、跨境：日本語文学研究、2017（04）。

が自費出版に参入した。出版社だけではなく、新聞社や印刷会社などの他分野が参入することにより、競争原理が作用しはじめ、マーケティングが導入されるようになった。それにより、潜在需要が掘り起こされていき、自分史口座などの自分史作り支援サービスと結びつきながら、自費出版業務から「自分史」という分野が自立していくのである。⁽¹⁴⁾ また、出版不況といわれ続けている中、著者側が制作費を負担する自費出版は年々増えている。自費出版では「自分史」といわれるコンテンツがかなりの比重を占める。自費出版の1つのコンテンツとして、多くの出版社は自分史の業務を行われている。こうして1980年代、自分史はひとつのブームとなる。

そこに、釋七月子は、自分史の書き方本によって自分史の歴史を三つの時期に分ける。1980年代は、自分史が自費出版ビジネスとして追及され始め、世の中に広がっていきという時期である。1990年代後半は、自分史が定着しつつある時期である。「北九州市自分史文学賞」をはじめとする自分史関連のイベントも整い始めている。また地方公共団体やカルチャーセンターの自分史講座が定着し、自分史を書くグループも各地にできてくる時期である。21世紀に入ると、自分史がもはや一般化し、戦争体験者の減少に伴い、社会教育としての自分史は使命を終え、文章教室が主体になった。21世紀は、自分史の書き方を知りたい、自分史を出版したい、という人々のニーズが高まってきたことを利用した出版産業が活躍する時代でもある。自分史が一つの産業として成り立っていくことを目指す「自分史産業」がスタートする。

(二) 多様になる自分史

2000年代、インターネットの普及によって自分史はより多様化になっている。まずは、自分史を書く人の年齢層が拡大し、割合は少ないが、高齢者以外の世代の人も自分史を書くようになっていく。たとえば、高校や専門学校、大学では就職対策として自分史を書かされることがある。この自分史を作成する目的は、自分の価値観を明確にすることであり、つまり、自分史の「自己分析」の効用に着眼している。自分史の作成は、企業選びや面接の準備に役立つと思われる。

(14) 釋七月子、戦争の記憶と自分史の変遷：自分史の書き方本からのアプローチ、跨境：日本語文学研究、2017（04）。

中小企業の経営者も自分史出版業務の潜在顧客と考える。中小企業庁によれば、2015年の経営者年齢のピークは66歳。勇退・事業承継は大きな問題であり、これを機に「仕事史」という自分史をまとめたいという需要が高まっている。同時に、彼らをターゲットにした自分史関連ビジネスへの期待も高まっている。⁽¹⁵⁾

また、自分史の表現形式も多様になっている。形態は文字組の本とは限らず、写真集、電子書籍、スライドショーデータ、動画などの形が現れ、書籍などの紙媒体についても、必ずしも時系列的な記述方法をとるのではなく、また俳句や短歌、写真を多く採用するものなど、多様なかたちで自らの人生を表現するものが生まれている。⁽¹⁶⁾ 本人が自分史を記録したいという場合以外に、長寿祝いの節目の年齢や金婚式等の結婚記念日を迎える父や母、祖父母へのプレゼントとする場合もある。また、取材者は一人に限らず、「夫婦史」、「家系図」などのような「自分史」も出現した。

出版社の業務には企画・素材集め・構成検討・原稿執筆・編集・印刷・出版などが含まれ、自分史制作の全体をカバーする。新聞社も自分史事業を始めた。朝日新聞社や読売新聞社は、記者経験者による取材やインタビューを行い、依頼者の自分史を制作代行するというサービスを提供している。また報道写真の使用を認めたり、各支局に人を招いて自分史作成相談会を開くなど、新聞社ならではのサービスも売り物にしている。

四、自分史と高齢化社会

(一) 自分史と高齢者

自分史の著者に大半を占めるのが高齢者である。老年期に入った彼らは人生を振り返ることが多く、記録として残したいという動機から自分史を書き始める。この部分では、精神面と身体面を分けて、高齢者に対する自分史の影響を考察する。

川又俊則は「自分史活動」を高齢者たちの「自己表現」の一方法としてとらえる。

(15) 野見山肇. 多様性を増す自分史市場に、経営拡大のチャンスが. Boss=月刊ボス, 2019年2月。

(16) 菅沼文乃. 自分史のなかに書かれる古い 沖縄県の高齢者向け自分史講座を事例とする人類学的研究年報. 人類学研究, 2019 (09)。

自分史を書く人々は、自分自身のことを書く一方で、それを読むと想定している近親者へ自己の存在を伝えたいという強い欲求を持っている。「かけがえのない個」の存在をアピールしている。そして、そこからは、個性ある一人の人間としての存在証明という、高齢者たちの強い意識が見い出せるのである。⁽¹⁷⁾ また、人生の再吟味、アイデンティティーワークとして自己のストーリーを書くこと、世代継承の可能性などは自分史を書くことによってみいだされる魅力であると小林が指摘した。⁽¹⁸⁾ 自己の経験を伝えたいという強い意識も、自分史執筆の動機となっている。色川は、「ふだん記運動」からはじまった「自分史運動」は、伝承の直接の相手を失った高齢者たちが、自らの記憶の消滅を惜しみ、直接ペンをとって記すことから始めたと考える。⁽¹⁹⁾

また、明るい、プラスの経験のみでなく、困難な経験をも文章化することで、それを再整理し、人生を再評価することができる。書くことによってその苦難は消えるわけではないが、苦労や困難として負の意味を付与されていたことを自分の言葉で書くことによって、それを正の意味に自ら転換することができる。この転換は、マイナスからプラスへ、縛りから解放へ、恥から救いへという三つの意味があげられると小林が述べている。つまり、精神面において、自分史を書くことによって、人生を振り返り、戦争体験などの苦難を乗り越え、自らの人生の経験と積極的に向き合い、人生を再評価することができる。

また、身体面において、自分史は高齢者の健康増進の一環として活用する可能性が示される。特に高齢知的障害者の発症に対する自分史の効果が多く研究され、豊かな成果が見られる。認知症予防に対して、「回想法」という療法は効果があると思われる。多くの市町村が認知症の介護予防に回想法の導入を検討したり、「回想法センター」を開設するところも出てきている。⁽²⁰⁾ 自分史作成は回想法の一つの応用として挙げられる。資料・ビデオ・写真などの媒体を活用し、その時代の参加者の年代や地域の出来事への回想を促し、そして回想した内容を自分史として書きこむ。この過程において、人生を回顧しながら、脳の働きが活性化

(17) 川又俊則, 大衆長寿社会における自己表現の方法, 現代社会学研究, 1999年第12巻。

(18) 小林多寿子, 日本の自分史実践における「第二の生産者」と自己反省的言説, 法學研究——法律・政治・社会, 2017 (01)。

(19) 色川大吉, 昭和史 世相篇, 小学館, 1994, p.43。

(20) 井山ゆり, 山天下也, 加藤真紀, 磯村由美, 地域での認知症予防教室における自分史作成を取り入れた回想法の効果, 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 2007 (01)。

になる。

認知症の予防だけではなく、認知症介護に対しても自分史の価値が見られる。現在の認知症ケアの主流である「パーソンセンタードケア」⁽²¹⁾の理念について、長谷川和夫が「認知症の本人を中心にして対応すること、これは個人の内的体験を理解すること、そして誰も他者が代行できない個性があること、生まれてからの独自の自分史をもっていることが、人間存在の尊厳を創っている」と述べている。⁽²²⁾つまり、個人の人生価値の尊重に基づいて書かれる自分史は、認知症ケアの理念と合致する。

(二) 高齢化社会における自分史

川又俊則は自分史活動の活発を日本の「大衆長寿社会」の表象と考えている。人口の高齢化に直面している日本において、高齢者の生涯学習は、自己実現、生き甲斐に関わると同時に、近年激しさを増す技術革新・社会変化への適応に関わるものであり、社会を左右する重要な課題と思われる。⁽²³⁾自分史の創作活動も高齢者生涯学習の一環として位置づけられる。

日本における自分史の特徴として一貫して見られる「ともに書く」という書き方のスタイルがある。⁽²⁴⁾自分史の歴史に辿り着き、「ともに書く」という特徴が見られる。自分史の原型である「ふだん記」運動の性質について、色川は「都市で孤立化を深めていた人たちが新住民も旧住民も、互いに苦しかったこと、失敗したこと、嬉しかったことをさらけ出し、共感しあい、表現することを助け合う、そうした文章結社としての「ふだん記」共同体を創ったのである」と述べている。⁽²⁵⁾つまり、自分史というのは私的な性格を持っているものであるが、自分史を書くことは常に集団活動のような形で現れる。これは日本における自分史の流行の一つの原因といえるだろう。こういう「ともに書く」という特徴によって、自分史は高齢者の社会的孤立への介入の効果があり、自分史の執筆と地域交流は、高齢

(21) 1980年代にイギリスの老年心理学教授トム・キットウッドにより提唱された認知症ケアの一つの考え方。認知症をもつ人を一人の「人」として尊重し、その人の立場に立って考え、ケアを行う。

(22) 第56回日本心身医学会総会学術講演会より。

(23) 江澤和雄、「超高齢社会」における高齢者の学習支援の課題。レファレンス、2013(8)。

(24) 小林多寿子、日本の自分史実践における「第二の生産者」と自己反省的言説。法學研究——法律・政治・社会、2017(01)。

(25) 色川大吉、昭和史 世相篇。小学館、1994、p.187。

者の社会への参与を促進することができる。

今では、地域資源として高齢者の経験と知恵を地域社会全体で共有するための「自分史アーカイブス」の作成と、このアーカイブスを利用した語りの共有と継承、そのうえで、地域住民と行政・NPO・大学が連携を取ることで、高齢者による地域社会の自立促進させるためのシステムの構築を目指す研究課題⁽²⁶⁾がある。

その一方で、高齢者に不当に高額な自分史を売りつける悪徳商法も存在し、自分史に関連する被害が出現した。自分史に関連しての被害は大きく分けて2つある。自費出版による制作費用をめぐる詐欺の問題、そして自分史を話題にして居座る強引な訪問販売が問題となっている。⁽²⁷⁾その常套手段は、高齢者が執筆した原稿を褒め称え、たとえば自分史コンテストなどを開催し入賞者に対して出版を勧め、制作費用を前払いさせる。また、自分史の作成は詐欺に繋がらなくても、その内容はデリケートなものであり個人情報やプライバシーの問題にも及ぶ。これに対して、自分史活用推進協議会に属する自分史活用アドバイザーは、上記のような被害者が出ることで自分史に対するイメージの低下をなくすために被害者相談などを行っているが、自分史市場はさらなる整備される必要がある。

おわりに

本研究では、日本における自分史の展開に辿り着き、自分史の歴史・社会価値とその文化的意義を明らかにすることを試みた。日本において、最初の「自分史」は戦後庶民の文章運動から生まれ、70年代に歴史学者の色川大吉によって名づけられ、提唱された。そして80年代から自費出版の商業販売ビジネスとして一般化し、多様なかたちで自らの人生を表現するものとなっている。

日本における自分史の流行の主な原因としては、「昭和」という時代の特殊性がある。色川は昭和を「この昭和時代のような激動の時代なかったほど激しく全国民を巻き込んだ時代」と称した。こうした時代に身をおいた一人として、色川は「人間にとって真に歴史をふりかえるとはなにを意味するのか。その人にとって

(26) 早稲田大学の久保田治助による高齢者の戦後地域活動に関する経験知の継承による自分史アーカイブスの構築という研究課題である。

(27) 高齢者住宅仲介センターの資料を参照 (<http://en-count.com/>)。

のもっとも劇的だった生を、全体史のなかに自覚することではないのか。そこに自分の存在証明「レーズンデートル」を見出し、自分をそのおおきなものの一要素として認識することではないのか」⁽²⁸⁾と自問し、自分史を書き始めた。

「昭和」の歴史は当時の大多数の国民にとって文字通り同時代史であり、個人がそれぞれに体験と記憶を持ち、「自分史」を書くことによって、自分の人生を振り返り、普通の人でも、自分の歩みを「歴史」の一部分として歴史に残ることができる。それによって、自分史は歴史研究の分野において史料として用いられ、歴史の進展に対する個人の主体性を反映することができる。

また、「自分史」とは、ある意味で、人生のありのままの「告白」ということができる。⁽²⁹⁾都市で孤立化を深めていた現代人は、自分史の創作によって文章結社の共同体を創り、そのグループの中で自分の存在価値を確かめる。こういう「ともに書く」という特徴は、高齢者の社会参与のニーズを満たし、自分史の発展に役立った。高齢化社会の進行に伴い、自分史の活用によって高齢者を支援することが期待される。さらに、自分史の「自分」を乗り越え、その中にある民衆共有の思想を今後の課題としてさらに研究する必要がある。

参考文献

- 色川大吉. ある昭和史—自分史の試み. 中央公論社, 1975年。
 林健太郎. 昭和史と私. 文藝春秋, 2002。
 加藤周一編. 私の昭和史. 岩波書店, 1988。
 色川大吉. 昭和史 世相篇. 小学館, 1994。
 成田龍一. ある色川大吉考—「昭和」との格闘. 2022年度東京経済大学学術シンポジウム。
 川又俊則. 大衆長寿社会における自己表現の方法. 現代社会学研究, 1999年第12巻。
 山下洋輔. 日本における自分史の特色. 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, 別冊16号—1 2008年9月。
 長谷亮介. 「戦後歴史学」から見る戦後日本における歴史学の変遷: 歴史学研究会を例にして. 博士論文: [法政大学], 2016。
 野見山肇. 多様性を増す自分史市場に、経営拡大のチャンスが. Boss=月刊ボス, 2019年2月。
 菅沼文乃. 自分史のなかに書かれる老い. 沖縄県の高齢者向け自分史講座を事例とする人類学的研究. 年報人類学研究, 2019 (09)。
 小林多寿子. 日本の自分史実践における「第二の生産者」と自己反省的言説. 法學研究——法律・政治・社会, 2017 (01)。
 釋七月子. 戦争の記憶と自分史の変遷: 自分史の書き方本からのアプローチ. 跨境: 日本語文学

(28) 色川大吉. ある昭和史—自分史の試み. 中央公論社, 1975, p.32。

(29) 自分史白書編集委員会. 自分史白書, 2016。

研究, 2017 (04)。

江澤和雄, 「超高齢社会」における高齢者の学習支援の課題, レファレンス, 2013 (8)。

井山ゆり, 山下下也, 加藤真紀, 磯村由美, 地域での認知症予防教室における自分史作成を取り

入れた回想法の効果, 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 2007 (01)。

自分史白書編集委員会, 自分史白書, 2016。